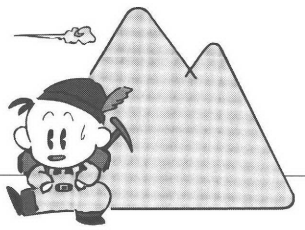

雨飾山南陵

慶應義塾大学 医学部外科学教室
久保田 哲朗

1970年冬

1970年12月、私は慶應義塾大学医学部山岳部の3年後輩であるHと、小谷(おたり)温泉から大海(おおみ)川を遡った雪原のテントを未明4時頃出発して、雨飾(あまかざり)山南陵を目指した。雨飾山は頸城(くびき)山系の西端にあたり、標高1,963mと低いながらも日本百名山の一つである。われわれは、長年先輩達が試みてきた小谷温泉から積雪期の雨飾山への登頂に1968年に成功し、1969年積雪期には妙高側から火打山、焼山、金山を経た縦走も行っており、残るは「ふとんびし」と呼ばれる雨飾山南陵の積雪期登攀だけが目標であった。

私は、1970年夏には工学部の同級生とヒンズークシ6,000mの初登攀に成功しており、帰国当初は赤血球が600万くらいあった上、体重は現在より10kg軽くて登攀体力のピークにあった。樺平（かんばだいら）の東に広がる雪原を行き、雨飾と樺平間のコルを目指して登攀を開始した。雪は深く2人でのラッセルはきつかったが、大海川沿いに夏道ルートを辿るA（現：救急部医師）をリーダーとするサポート隊のランプが見えて心強かった。コルから「ふとんびし」の基部までも深いラッセルが続いた。夜もすっかり明けきった頃、基部に到着し、Hとザイルを組んで南陵の登攀を開始した。Hは、私が現役最後の登攀（翌年は国試後入局）であることから、私にトップを譲りセカンドで確保してくれた。岩は思ったよりもろくハーケンが打ちづらかった。2ピッチまでは順調であったが、3ピッチ目に東側の荒菅(あらすげ)沢に岩壁が落ち込むところへ来ると、高度感がきつくなった上に岩がもろく、ハーケンの入りがますます悪くなった。それでもじりじり頂上を目指し、これを越えればまず登りきれるだろうと思われた場所でハーケンを打ち込んだが、半分くらいしか入らず、「これは落ちたら効かないだろうな」と思いながら登攀を続行した。荒菅沢の真上に出て、さらに上にあがろうと両手でかなり大きい岩を掴んだところ、何とその岩はすっぽり抜けてしまい、私は岩を持ったまま荒菅沢に転落した。途中で岩を離したら、岩は荒菅沢をまっしぐらに落ちていった。最後のハーケンが気になっていたので、「いよいよダメか」と思った。この間ほんの1、2秒であったと思うが、ザイルがピンと張って私はヘルメットから岩壁にぶつかり、Hが必死で止めてくれたことに気付いた。いつもは落ち着いていて、危機的場面もシニカルに笑い飛ばすHが、「久保田さ～ん大丈夫ですか？」と心配そうに叫ぶのが聞こえた。どうやってHの確保場所まで戻ったかは、よく覚えていない。なんとか南陵の基部まで降りて、すでに頂上で待機していたサポート隊のAに無線で連絡し、転落したので登頂を断念して下山することを伝えた。

私は帰京後、その翌春慶應外科に入局するために、雪焼けした真っ黒な顔のまま入局の面接試験を受けた。「その顔はスキーか山か」と質問をされ、「山で雪焼けしました」と答えたところ「学生時代に登った山の名前を述べよ」との追加質問を受けた。北アルプスはほとんど登ったこと、ヒンズークシ6,000mは初登攀であることなどの話をして、感心されているうちに面接時間が終わってし

雨飾山南陵

まい、外科学教室に入局を許された。

1971年積雪期、外科フレッシュマンであった私は病棟で働き続け、雪山は遠い夢となった。その冬のある日、雑誌「岳人」の記事で積雪期の雨飾山南陵を登った某山岳会の記録を読み、あのルートが登攀されたことを知った。たぶん、われわれのハーケンが役にたったのであろう。今にして思えば、「最後のハーケン」までに2カ所にハーケンを打っており、あの時一つのハーケン／ビナのセットをも回収していない。すなわち、Hの確保場所でザイルをどちらかがはずして回収した際には、「最後のハーケン」が効いていたため、このハーケンとビナ1セットも回収できなかったのであろう。

1999年秋

私が卒業後、Hは山岳部の中心的存在となり、後輩をまとめて先鋭的な登山を続けたが、卒業後他大学の放射線科に進んだため、私と会う機会は多くはなかった。私も外科の初期研修や研修病院出張で多忙となり、Hのみならず誰ともザイルを組むような難しい登攀をする機会は、二度とめぐって来なかった。1998年になって、前述のAからHが闘病生活を始めたことを聞いたが、お見舞いに行く機会を逸してしまい、Hは1999年10月3日他界された。あの濃密な時間を共有した最後のザイルパートナーの彼に、何もしてあげられなかったことが悔やまれてならない。Hの葬儀や追悼文集で、彼が私と共有していた学生生活の後に、小児放射線診断医として私の知らない大きな人生を切り開いていたことを知った。彼は「H助教授」「H先生」「H先輩」「Hさん」であり、私の知っている「H」と同じ個性と習性を保ちながら彼の世界で指導的な立場に立ち、多くの先輩・後輩に愛され、幸せな家庭生活を築いていた。

2000年冬

2000年2月、新潟で第72回日本胃癌学会総会が開催された。この時、当時の山岳部のメンバーと30年ぶりに小谷温泉を訪ねた。

前日3時までカラオケで騒いでいたため、宿舎のイタリア軒をやっと起床し、山行用のザックを背負ったまま学会会場へ向かった。山行装備はザックに入れたが登山靴は入らず、スーツに登山靴はいかにも不釣り合いで皆に冷やかされた。午後2時からのポスターセッション座長終了後、タクシーで新潟駅へ向かった。雷鳥46号は新潟発大阪行きの特急で、指定座席は1／3程度の埋まりであった。15:42発で長岡・直江津経由糸魚川へ向かう。冬の日本海は太平洋と違って寒く寂しい。少し海から離れると雪が積もっていた。糸魚川駅まで約2時間で、途中で電圧切り替えのための停電があった。糸魚川駅では、大糸線から関西方面へ帰るために雷鳥に乗り換えるスキー客がいたが、駅に降りる人は少なかった。糸魚川発南小谷行きの最終は18:31発で50分くらい待ちがあり、ホームは寒いので駅前の居酒屋で生ビール・串かつ、肉じゃがを食べた。電車に乗る前に小谷温泉の山田旅館に着いていたA先輩（精神科医）に電話し、南小谷ではなく中土（なかつち）で降りるように勧められた。最終電車は1両ディーゼル車のワンマンカーで整理券を取るようになっていたが、糸魚川駅のみは整理券はいらないらしかった。乗客は10名ちょっとで、通学の高校生と通勤客らしく、途中の小さな駅で定期券を見せて降りていった。糸魚川駅からの大糸線は単線未電化で、途中のトンネル内はつららで覆われていた。窓から寒気が入り込んで

窓際は寒い。私は、新潟発信越・北陸・大糸・篠井・中央東線経由新宿行きの切符で中土で途中下車した。降りたのは私１人だけであった。中土の駅は無人駅で雪に覆われ、ホームと駅舎の前だけが除雪されていた。駅前は真っ暗で、車庫内で洗車している人が１人、反対側の車庫に空車のタクシーがエンジンをかけたままになっていた。空車タクシーの方へ行ったら、洗車していた人がタクシーの運転者で小谷温泉まで行くとのことであった。

南小谷から小谷温泉へ向かう車道は、中土近くまで大糸線に平行しており、中土から少し行ったところで、中谷川沿いに山の中に入っていった。谷に入ると人家も稀になり、川沿いに雪の中を小谷温泉へ向かう。ずっと左岸を走り、最後に橋を渡って右岸に移ると熱湯（あつゆ）を経て小谷温泉に到着した。山田旅館は昔と変わらず、軒下に雪を溶かすための池があった。玄関には誰もおらず、台所で旅館の人を探し、部屋に荷物を置いたあと、新館での食事へ出かけた。当時の山岳部の同僚達がすでに食事中であったが、自分は糸魚川で一杯やってきたので、加熱するものだけを食べて、あとはビールを飲んだ。すでに皆入浴しており、食後自分だけ温泉に入浴した。久しぶりの小谷温泉の風呂は、記憶していたより小さく思えた。入浴後、部屋で飲みながら話を続け、こたつに足を入れながら江戸時代からの寒い部屋で寝た。

翌２月20日、朝６時前に目が覚めたので１人で入浴し、山支度をして林道沿いに大海川の上流に向かった。小雪がちらつき、視界は不良であった。歩き出してすぐに「冬の単独行は死を招くのでしないように」との掲示があった。途中で、乙見山峠から笹が峰牧場／妙高高原駅（昔は田口駅と言った）へ抜ける道を右に分ける。ずっと昔1969年夏には、妙高高原から乙見山峠を歩いて越えてきたことがあった。今では夏は車を通すらしいが、冬は除雪をしていない。これより少し上流から踏み跡がなくなり、スキーのシュプールのみとなった。以前、山田旅館から鎌池や樺平へ往復していたのは、この林道から小さな谷を隔てた西側の斜面であったと思われたが、谷がかなり大きくて越えることはできなかった。林道は大海川沿いに続き、シュプールは途中まで林道沿いになっており、そのうちシャントするために急な斜面となった。ここからのラッセルが膝までできつく、小雪もちらついて自分のラッセル跡を埋めるので、上の林道が見えた時点で撤退を決めた。念のために携帯電話を見たら、案の定「圏外」であった。温泉から約1.5時間で、冬のテント場へ半分も行っていないところだった。

その後、１月の小谷合宿は整形外科医のＩ先生が中心となって毎年続けられ、2002年には2000、2001年に自分が到達できなかった鎌池まで４名のメンバーが登攀した。この年、私は真夏のようなバンコクの学会に参加していて、合宿には参加できなかった。左頁の写真は、同年Ｉ先生によって撮影された「雨飾山南陵」である。30年前の私は、この途方もなく遠く厳しい岩壁に、今はいない「H」と登ろうとした。

筆者近況

現職：慶應義塾大学医学部外科学教室助教授。

専門：胃外科、外科腫瘍学。

同じ外科胃班の先輩に直属の上司で医学部長、日本癌治療学会理事長の北島政樹教授、看護医療学部長、第74回日本胃癌学会会長の吉野肇一教授がいらっしゃいます。彼らの肩書きを全部書くと原稿枚数を超えるため省略しますが、偉大な先輩を身近に持つと肩の荷が重いものです。30年前にＨ達と樺平東雪原にベースキャンプを張った時の、40kg近い旧式なキスリングを思い出します。